

帰ってきた男

1

春でもないのに、やたら瞼が重い。頭が接着剤をつけられたように枕からあがらない。こじあけた目には霞がかかっている。

眠い。このまま百年だつて二百年だつて眠れそうだ。

この時期、学校をサボるわけにはいかないことはわかっている。出席日数がギリギリなのだ。これ以上、欠席が増えると、卒業証書がもらえなくなる。そうなれば、いくら国家権力の後押しがあるとはいえ、東大入学は不可能だ。

それはまずい。数々の危険——殺し屋を敵に回し、ゲリラと渡りあい、鰐と仲よくして——をおかしてまで、手に入れようと思つた銀杏マークの学生証が遠のいてしまふ。

行商人のせがれから出発して、数々の苦難をのりこえ、ついに人生の勝利者の地位に達す

るはずだつた、冴木隆クンの人生スケジュールにひびが入る。

頑張つて起きるのだ。起きて顔を洗い、「麻呂宇」でモーニングサービスを食べ、地下鉄に乗つて、都立K高校に向かわなければ。

人生の成功は、まず一步一步の地道な努力からなのだから。

このまま寝ていても、誰も起こしてはくれない。親父は、きのう僕がベッドに入った午前一時の段階で、まだ帰っていないかつた。帰っていないかもしれないし、帰っているとでも高艀にちがいない。あの人をアテにしている限り、勝利者への道は遠い。

起きろ、起きるんだ。

全精神力を使って体を起こした。暖かな陽ざしが窓からさしこんでいる。

秋の夜長なんて誰がいったんだろう。

育ち盛り的高校生には、長すぎる夜なんてものはない。

僕はようやく上半身を起こして大あくびをした。

王女ミオの護衛から始まり、ジャングルのどんちゃん騒ぎに終わった、ライールのお家騒動から一カ月。

ついに受験まで半年を切っていた。あの騒ぎで、親父の依頼人である国家権力には、たっぷり恩を売つたので、東大推薦入学は、ほぼまちがいないところだが、きのう進路指導の担任から、キッソー警告を与えられたのだ。

「冴木隆、三年で高校生活を終わりたいか？」

「この学校にとっても愛着はあります。ですが、やはり物ごとには潮時があるのじゃないかなー、なんて……」

「愛校精神に溢れるのは結構。だったら、三月の終業式まで、今後いつさい欠席、遅刻はしないことだ。さもないと、楽しい四年目がお前を待っているぞ」

「げっ」

回想から我にかえり、枕もとの時計を見た。

「げっ」

針は無情にも七時四十分を指しておる。やばい、すぐに出なければ遅刻だ。

ベッドからとびおり、スラックスに両脚をつつこんだ。片脚ずつではなく、一度に両脚でスラックスをはけるのは、数あるリュウ君の特技のひとつ。

スウィングトップをこわきに抱え、部屋を出て、僕はリビング兼事務所に駆けだ。

おや珍しい。親父がこんな朝早くからデスクにつき、難しい顔で煙草を吹かしている。

さてはきのうの麻雀の負け戦が腹にすえかね、一睡もできずに朝を迎えたか。

「起きてんなら、起こしてくれた方がいいじゃない」

思わず言葉がスルドくなる。大体、誰の手伝いをしたおかげで、出席日数が足りなくなっておるのか。

「目覚ましの使い方も忘れるほどジャングル惚けたか？」

「よくいうよ、そういう問題じゃないの」

親父ははき古したコットンパンツにヨットパーカーで、無精ヒゲという、いつもの姿。

「ずいぶん向学心に燃えているじゃないか。タイトスカートの似合う先生でも赴任してきたのか」

「あのね、自分を基準にしないの。卒業がやばいんだから」

親父の目の前には、ワイルドターキーのプラスチックボトルとショットグラスがおかれていた。灰皿は吸い殻の山。よほどくやくしくて眠れなかったと見える。

僕は親父がちょうど取りあげたショットグラスを横あいから奪いとった。朝食抜きなら、気がつけが必要だ。

「おい、未成年が朝からバーボン飲んでいいのか」

「中年が働きもせずに朝からバーボン飲んでるよりマシ」

「その様子じゃ当分、バイトは無理だな」

「無理無理。『仰げば尊し』、歌い終わってからにしてくれる。じゃあね」

いいすてて僕は玄関のドアを開いた。ドアには我が家の窓の外のネオンと同じく、筆記体で「SAKI INVESTIGATION」の文字が入っている。

つまりは私立探偵。

母親の顔を知らない僕が子供の頃から、この冴木涼介不良親父は、

「商社マン」に始まって、

「オイルビジネスマン」だの、

「ルポライター」、

「行商人」といった怪しげな商売に手を出し、あげくの果てが、

「秘密諜報員」と来た。

何がヒミツチョーホーインなのかさっぱりわからないが、おおかた行商で鍛えた語学力と面の皮の厚さ、それに諸外国暗黒街における顔の広さを買われたのだろう。

結局、とどのつまりが、この広尾サンタテレサアパートに、探偵事務所を開くことになった。

大家で一階のカフェテラス「麻呂宇」の圭子ママが親父に優しいのと、現役チョーホーインの、内閣調査室フクシツチョー島津さんが仕事を回してくれるおかげで、我が冴木家は、何とか路頭に迷わずすんでいる。

ごく平均的都立高校生であろうとつとめる僕が、ちつとも平均的になれないのは、すべからくこの、退廃的、労働心向上心道徳心欠如の親父のせいである。

世界広しいえども、息子に爆弾をしようしたり、殺し屋をおびきだす罠にしたり、変態異常性欲者の真似をさせる父親はこの人くらいのもだろう。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。